

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連278載

「音」の神秘

私たちのまわりは、音であふれている。朝は鳥のさえずりからはじまり、食器が触れ合うカチャカチャした音や服に手を通す衣擦れの音。外に出れば車のエンジン音や信号機のメロディなど、数々の音たちは個々の生活に密接して存在し、一度耳にした音は思い出や記憶と深く結びついている。

はじめてニューヨークへ行ったとき、おびただしい車のクラクションに加えて、夜中まで続くパトカーや救急車のサイレンに驚いた。これが大都会ニューヨークだと刷り込まれ、以後ニューヨークといえ、あの喧騒がよみがえる。聴覚は、最後まで残る感

文化にも関わる。例えば、寺の鐘は梵鐘、あるいは一般に釣鐘と呼ばれている。おおみそかの夜などに深い闇の中に響きわたる鐘の音は、厳かでどこか恐れ多い。瞑想やヨガの時に使われる鈴はティンシャといい、意識を集中させるときに役立つ。

人にとって鐘といえ、多くは前者を思い浮かべるのではなからうか。

音のほとんどない世界で暮らす人も多い。昨年、日本で初めて聴覚障害者のための「デフリンピック」が開催され、各国のアスリートたちの活躍を目にするのができた。最近、聞こえない・聞こえにくい親を持つ子ども（コーダ）にも関心が高まっている。この傾向はコーダを主人公にした映画によるところが大きい。2022年公開の米映画「コーダ あいのうた」はアカデミー賞を取り話題になったが、これは2015年の仏映画「エール！」のリメイクであり、手話教育を確立したフランスらしい内容だった。

つが、あの世とこの世の境目ともいわれる。いずれも余韻が長く続き、それがまた心とからだに気持ちよく染みわたる。一方、西洋の教会でお馴染みのベルは、内部に垂らした分銅で鳴らすため音色はひたすら明るく、余韻は残らない。日本

彼らのコミュニケーションは、聴覚以外の視覚や触覚を使うが、それゆえに独



自の集団文化を作り上げ、それを「ろう文化」と呼ぶ。音にあふれていない世界に身を置く文化といえるが、コミュニケーションの基礎が異なることで、それぞれに分からないことや知らないことの発見がある。例えば、ろう者は聴覚以外の感覚を使うため目を見て会話する。ところが私のように聞こえる者は、むしろ視線を逸らすことも多い。最初は互いに、「なぜ？」という素朴な疑問を抱くのだが、それも少しずつ分かり合えていくという。

手話は世界共通ではない。国によっても地域によっても違いがある。ろう者であり写真家・文筆家でもある齋藤陽道さんによれば、手話は言語を超えて人と人を結び付ける生きた動きだという。音のない世界の「生きた動き」とはどれほど豊かなのだろうか、想像を掻き立てられる。これもまた、静かな世界の「音の神秘」といえるだろう。

イラスト・伊藤香澄